

## 資料紹介

# 『見聞録』・『聖宗遺草』及び『夜窗鬼談』と 『聊齋誌異』との比較研究

陳 炳崑

## 1. はじめに

中国清朝期の蒲松齡（1640～1715）の『聊齋誌異』は広く読まれ、日本やベトナム（越南）の文学にも影響を与えた。ベトナムでは漢文小説が近年出版されるにしたがって、中国とベトナムの文学関係に関する研究も徐々に増えてきている。『聊齋誌異』とベトナム小説との関係も明らかになりつつあり、『傳記摘録』<sup>1</sup>と『見聞録』、『聖宗遺草』<sup>2</sup>等のベトナム小説のなかには『聊齋誌異』を翻案した話が多くある。日本の石川鴻齋が著した漢文小説『夜窗鬼談』のなかにも『聊齋誌異』より取った多くの話がある。さらに『聊齋誌異』の同じ話をもとにした話が『見聞録』や『聖宗遺草』、『夜窗鬼談』に収められている。そこで本稿では、共通する話を資料として中国、日本、ベトナム小説におけるプロット、思想、創作手法を比較し、ベトナム、日本の漢文小説が『聊齋誌異』からどのような影響を受けているのか、三者における特徴や物語にはどのような異同があるのかを明らかにする。

## 2. ベトナム漢文小説『見聞録』

『見聞録』の作者武元亨（1739～1828）は名を貞、字を維周、または元亨、別号を蘭池魚者といい、北寧琅才の春蘭の人である。官吏となったものの辞めて故郷に戻り、学問を教え書き物をして、明命九年（1828）に没した。著書に『宮怨詩集』、『見聞録』等があり、『見聞録』は『越南漢文小説叢刊』の「出版説明」の推論によれば<sup>3</sup>、1790年から1802年の間に著されたとされる。『見聞録』の執筆目的は、親戚の呉辰償による序から知ることができる。『見聞録』の目的は官を辞し隠居している折り、これまでの見聞に基づき主

に勸善懲惡の教化を行うというものである。だが、文体やエピソードは多く『聊齋誌異』を真似ている。各話は姓名、出身から始まり、主人公の話へと進む。なかには「蘭池魚者曰く」と附しているものもあり、『聊齋誌異』の「異史氏曰く」の影響を受けている。

『見聞録』は二巻あり、35篇の話がある。彭美菁によれば、その多くが『聊齋誌異』より取っているという。例えば、

「義虎」：「毛大福」・「趙城虎」（『聊齋誌異』巻12、5）

「再生」：「封三娘」・「連城」（『聊齋誌異』巻5）

「蘭郡公夫人」：「胡四娘」（『聊齋誌異』巻7）

「記三生」：「三生」（『聊齋誌異』巻1）

「阮状元」：「青蛾」（『聊齋誌異』巻7）

である。以上の作品はその内容、プロットなどは『聊齋誌異』からほぼ取っている。逐一列挙しないが、これ以外にも部分的に『聊齋誌異』から取っている話もある。

### 3. 「再生」、「阿娟蘇生」並びに「封三娘」

「再生」（『見聞録』）と「阿娟蘇生」（『夜窗鬼談』）<sup>4</sup>の原作である「封三娘」（『聊齋誌異』）と比較し、その異同と特色を検討する。最初に個々の作品の内容（愛する人の死と甦り）を簡単に紹介する。見聞録の「再生」は次のような話である。東山県に住む陶生の隣には彼と年齢の近い娘を持つ翁が住んでいた。ある夜、娘が灯りの下ひとり布を織っていると陶生が会いたいと言ってきた。だが、娘は男女には別があるからと断り、もし自分に気があるなら誰かを仲人にたてて結婚を申し込んでくださいとお願いした。意外にも翁は貧しいことを嫌い、結婚を許さなかった。陶生は上京し、後に郷挙となるが、故郷に戻ってくると娘はすでに村の富農と結婚していた。その後、陶生は娘と夫が田圃で働いている姿を見るが、二人が知り合いであることを知った夫は怒り、思わず妻を打ち殺してしまい、ひそかに埋葬した。それを知った陶生は弔いに娘の墓に夜行き、まだ体に温かみがあることを知る。そして、娘を家に連れて帰り、薬で治療した。その後、娘を親友の家に預けた。ある日、農夫は市場で妻と似た女を見かけたので棺桶を見てみると遺体はな

く、役人に訴えた。役人がその原因を知り、農夫の罪を問い、娘の蘇りが認められた。

日本の『夜窗鬼談』の「阿娟蘇生」の概略は次のとおりである。大阪の富豪商人の娘阿娟と隣に住む煙草売りの息子國蔵は相思相愛の仲であった。だが、貧富の差があり身分が違うため会うことができなかった。阿娟はある貴族の息子から結婚を迫られていた。だが、その男にはすでに妻がおり、妻は夫の結婚に不満を感じ、井戸に投身自殺をした。阿娟がその貴族の家に嫁いで行った時、突然生臭い風が庭から起り、灯りが消え、妾だった女が輿入れする輿のそばにポーッと立っていた。貴族の息子は怒り、阿娟を妾だと誤って思い、刀を抜いて斬殺してしまった。斬殺された阿娟は香花院に葬られた。國蔵はその姿を見たいと墓を掘り起こしたところ、阿娟がまだ死んでいないことがわかった。そこで阿娟を彼の故郷である讃岐丸亀まで遠く連れて行き、叔父に頼んで宿の帳場を手伝わせた。その後、阿娟は両親と会い、両親は丸亀に分店を出し、阿娟に任せた。

「封三娘」は次のとおりである<sup>5</sup>。范十一娘は上元節に水月庵で開かれた盂蘭盆会で一匹の狐が化けた女、封三娘と知り合った。後に二人は仲良くなり、范十一娘は封三娘の手引きで貧しい秀才である孟安仁と知り合った。孟安仁はある老婦人を仲人にたてて范家に結婚を申し込んだ。だが、范夫人は孟安仁が貧しいことからそれを断った。その後娘は両親にある紳士の息子との縁談話を受けるように言われた。娘は孟安仁のことを思い、首つり自殺をし、三日後に葬られた。孟安仁は封三娘の言葉を聞いて墓を掘り棺桶をあげた。封三娘が薬を注ぐと范家の娘は息を吹き返した。封三娘は孟安仁と范十一娘を辺鄙な山村に隠した。ある日、娘は計って孟安仁と封三娘を同衾させた。その後、封三娘は二人に自分が狐仙であることを告げ、彼らと別れた。一年後、孟安仁は進士となり故郷に戻り、范家へ行き、また両親も見舞った。某紳士父子は汚職で捕らえられ、范十一娘はついに家に帰り親に会うことができた。

以上が三つの物語の概略である。ここでこの三作品の登場人物を対照してみよう。

「再生」

- A. 陶生（農家の子ども、容姿良く聡明、後に郷拳となり、紆余曲折を経て隣の翁の娘と結婚する。）
- B. 隣の翁の娘（陶生と同じ年で、美しい。陶生に好意を持っているが後に富農と結婚する。だが、富農に殺され、最後は陶生に救われ、彼と一緒にになる）
- C. 富農（隣の翁の娘の夫、思わず妻を打ち殺してしまう。後に妻がまだ生きていることを知り、陶生が妻を誘拐したと訴えるが、失敗する）

「阿娟蘇生」

- A. 阿娟（大阪の富商の娘で絶世の美しさを持つ。ある貴族の家に嫁ぐが、紆余曲折を経て最後は隣に住む國藏と結婚する）
- B. 國藏（煙草売りの息子、姿も良く、勉学に励む。時に楽しんで詩をよむ。最後には美人の阿娟を生き返らせ娶る）
- C. 某貴族（阿娟に求婚するが、結婚の時、誤って阿娟を殺す）

その他の人物－阿娟父母、鎌倉某、國藏の伯父など－

「封三娘」

- A. 封三娘（狐が化けた女、范十一娘の親友。娘は封三娘の助けで生き返り、恋人であった孟安仁と最後は結婚して夫婦となる）
- B. 范十一娘（國子監祭酒<sup>6</sup>の娘で美貌をそなえている。詩を詠むことは人並み以上に優れ、後にある紳士の子どもの結婚を迫られる）
- C. 孟安仁（貧しい秀才。外見も良く頭も良い。封三娘の協力を得て最後は范十一娘と結婚する。後に挙人となる）

- D. ある紳士の息子（范十一娘に求婚するも失敗する。後に父とともに汚職で逮捕される）

その他の人物－范十一娘の両親など－

上記の概略並びに登場人物紹介から「再生」と「阿娟蘇生」が原作と内容およびプロットの点で非常に似ていることが理解できよう。例えば、「再生」では翁は貧しい陶生を嫌い、娘を富農に嫁がせるが、陶生は娘を弔いに墓に行き、娘は生き返る。「阿娟蘇生」では國藏と阿娟の貧富の差が大きいため、阿娟は貴族の家に嫁がされることとなるが、後に國藏が墓を掘り、死んだ娘

が生き返る。このようにその構成は原著の「封三娘」の構成と同様である。だが、人物設定、思想、描写、文体などの点では次に述べるように違いがある。

「再生」の人物設定では「東山県の陶生、農家の子で、姿も良く賢く、父母が勉学をさせたところ、甚だ賢く・・・」と述べた後、陶生のエピソードに入っていく。作者が陶生を主人公としていることがわかる。それに対して娘については名前さえ書かれていない（ただ隣に住む翁の娘と一言書いてあるだけである）。ここからも作品の主人公が陶生であることがわかる。娘は物書きもできず、結婚して農婦となるのみである。この話は中国小説から取っているものの、作者は人物の設定を新たに变えている。

「封三娘」と「阿娟蘇生」の場合、「范十一娘は曠城祭酒の娘だった。若く妖艶で美しく・・・」、「浪華の商売人鎌倉某、・・・には絶世の美しさを持つ娘がおり、名を阿娟と言った」とそれぞれ始まり、女性を中心に描きながらエピソードが述べられる。故にこれらの作品は女性を主人公にすることに重きを置いていることがわかる。この他、「封三娘」では男女とは別の登場人物として封三娘が加えられており、范十一娘と親友の契りを結び、二人の女性の生死を超えて続く友情が描かれている。原著「封三娘」の主要人物は封三娘が主であり、范十一娘は従である。范十一娘の従としての役割を用いながら封三娘の人物像が作られていくのである。男性主人公孟安仁は三番目の登場人物である。この女性を中心とする描写は主人公の人物設定にも影響を与えている。原著では范十一娘は貧しい孟安仁に一目惚れするが、最後は封建意識を乗り越え、富貴や家柄に基づいて結婚するという伝統的観念を捨て、父母が勧める紳士との求婚を断り、殉死する。「阿娟蘇生」では阿娟は父母から貴族との結婚を迫られるものの、貴族がもし強く迫ってきたら死ぬ覚悟でいた。だが、「再生」の隣に住む翁の娘は父母の言うことを聞いて富農に嫁ぎ、強烈な結婚への反抗心は最後まで描かれない。

文体と語彙の点において「再生」と「阿娟蘇生」は中国語の文語文だが、平坦な記述で、男女の対話は少し固いものになっている。そのため物語全体が躍動感に欠けている。それに対して「封三娘」の文章は先の二作品と比べると文語文であるが簡易で読みやすく、かつ洗練されたものであり、男女の

会話も生き生きとしており、比較的楽しめるものである。

人物描写の点では、「再生」の場合、その描写は荒削りで、詳細な描写はない。記述そのものも少なく、人物の心理状態も描かれず、そこに技巧的には未熟感を覚える。一方、「阿娟蘇生」では男女の対話や小道具（男女が互いに贈る詩）などを通じて、男女の思いや強い感情が描かれ、登場人物の描写は豊かで「再生」と比べて違う味わいを持っている。「封三娘」の場合、物語そのものが長く、作者は封三娘や范十一娘などの人物像を様々な角度から非常に詳細に描き、真に迫るものがあり、読者に深い印象を与える。

三作品とも男女の愛情を描き、最後には夫婦となる物語であるため、その展開は似ている。つまり、出会い→相思相愛（或いは追い求める）→困難に出会う→成就である。

だが、男女の愛のあり方は異なる。「再生」では男性が女性を追い求め、女性は単に受け身の存在である。一方、「阿娟蘇生」では男女ともに慕いあい、互いに詩を贈り、その思いの苦しさを解放していく。また「封三娘」では男女の恋愛の物語を描くものの、主人公の范十一娘は度量があり殉死し、また親友である封三娘を登場させることで孟安仁の范十一娘を情熱的に追い求める描写の比重を相対的に軽減するものとなっている。男女の愛情物語の点で考えると、「阿娟蘇生」は男女の「情痴」を主題として描いていることは明らかであり、「封三娘」の場合、男女の生死を超えた愛情とその成就とは別に、封三娘と范十一娘との女性どうしの友情も描かれている。

#### 4. ベトナム漢文小説『聖宗遺草』

『聖宗遺草』は上下二巻からなり、19篇の物語が収められている。物語の中には末尾に「南山叔の評論」があるものもあり、黎聖宗が著したものとされる。黎聖宗（1442～1497）は、名を灝、諱を思誠、後期黎朝の第4代君主で、ベトナムを代表する英明な君主とされている。『天南餘日暇集』、『征南紀行』、『征佔城事務』等の軍政上の著作もあるが、晩年詩を詠むことを好み、群臣などと詩を作った。それらの作品として『瓊苑九歌』、『古今百咏』、『春雲詩集』、『古今宮詩集』等がある。聖宗時代は後期黎朝のなかでも最も漢文学が盛んな時期であった。『聖宗遺草』は許鳴金将が句読点をつけ校正した『聖

宗遺草』の「出版説明」によれば<sup>7</sup>、この書はおそらく後世の人物が聖宗の名に仮託して作ったもので、中には彼のものではない作品もあるとされている。だが、それはその文学的レベルを下げるものではなく、一部の良い作品の中にはある文士が創作したもの、民間伝説から取ったものもある。

『聖宗遺草』の「花國奇縁」の内容は『聊齋誌異』の「蓮花公主」を真似ているものである。

## 5. 「花國奇縁」、「藤生救雀」並びに「蓮花公主」

ここでは「花國奇縁」（『聖宗遺草』）、「藤生救雀」（『夜窗鬼談』）並びに「蓮花公主」（『聊齋誌異』）を比較して、ベトナム、日本の作家が書いた作品と原作との異同並びに個々の特色を検討する。

最初に個々の作品の概略を記す。

ベトナムの『聖宗遺草』の「花國奇縁」の内容は次のとおりである。興化山羅洞の周生は生まれてすぐ父母を亡くし、叔父叔母の家で育った。だが、叔母は周生を嫌ったので、周生は父母が残した空き家にしばらく住むことにした。周生がひとりひもじさに堪えて寝ていると、夢のなかにひとりの官吏があらわれ、彼は周生を国王の娘の夫となると考え、花城国の宮中に国母に謁見させるために連れて行った。国母は周生に自分の娘夢荘と結婚する約束になっていると告げた。その後周生が夢から覚めると、再び三日後に周生は夢を見た。ひとりの官吏が彼を迎えにきて宮中で夢荘と結婚した。このように三日に一度夢を見て、その後男児が生まれた。ある日、国母が出てきて、鴉や鵲の大群が国を襲い、人民の三分の一が呑まれるので遷都しなければならず周生とはしばらくのお別れで、子どもたちは26ヶ月後にまた連れてきますと述べた。また夢の中で夢荘は周生と別れを告げ、周生に一首の詩とお金十銭が贈られた。周生が夢から覚めると、叔母は死んでおり、周生は叔父の家へ戻った。後に周生は郷貢となり、叔父の養女同人を妾とすることが許された。その名は夢荘が別れの詩として贈ったなかにあったものと全く同じであった。一年後、同人は長男を生んだ。その顔は花城国の男児と似ており、周生と夢荘が別れて26ヶ月目のことであった。

後に武文悔が山勢険要の地を拠点に反乱を起こした時に天子は周生を出征

させた。周生が出会う形勢は夢荘が贈った詩の内容と符合するものであり、周生は初めて夢で出会った国母が蝶の女王であり、夢荘はその娘で、鴉や鵲が人を呑むというのは鳥が蝶を食べることだと悟った。周生は詩の内容に拠って敵に勝ち、再び夢で国母と夢荘に会い、その後朝廷に凱旋した。周生は自らは花の国の主で、長くはこの世にいられないと知り、暇を告げて家に戻り、家のことを処理してひと月も経たないうちに亡くなった。

日本の『夜窗鬼談』の「藤生救雀」は次のような話である。藤氏三郎は関西の書生で天徳精会の北院で学んでおり、そこに巢を作っているスズメに藤氏は米粒を与えていた。ある日の午後昼寝をしていると、夢に下僕の者が出て来て救いを求めてきた。彼に従って行ってみるとある翁がいた。翁は「自分たちの一族は近いうちに大蛇に襲われますのでどうぞ助けてください。いつか必ず善い報いがございますので」と述べた。藤生は救ってあげることは無理だといってそこを急いで離れようとしたが、翁や家族の者が彼を捕まえて離さなかった。そこで藤生は大きな声を出し、突然、目が覚めた。見てみると、一匹の小さい蛇が雀の巢にいるのを見た。そこで蛇を捕まえて後の山に放してやった。するとすぐにたくさんの雀が喜ぶように飛び鳴いた。その後、藤生は登用されてある省の試補になった。

中国の『聊齋誌異』の「蓮花公主」の概略はこうである。竇旭という名の書生が昼寝をしていると夢のなかで褐色の服を着た下僕が出てきた。下僕は人間の世界とは異なる形の大邸宅「桂府」に連れて行き、国王に面会させた。国王は宴を設け竇旭を歓待した。国王は娘の蓮花姫を彼と婚約させようとしたが、竇旭は見とれてしまい、返事をするのを忘れてしまった。彼は目が覚めてずっと後悔した。

ある夜、友人とともに寝ていると、夢で国王が部下をよこし竇旭を迎えに来させ、姫と結婚させた。その翌日は妖しい者が宮中に入ってきた。竇旭が国王と会うと、国王は大きな蛇が人々を飲み込もうとしていますと言った。姫と竇旭が家に帰ると、姫は彼に別の家を築いてそこに全ての住人を移しましょうとお願いしてきた。そこで彼が少し難しいと答えると、姫は竇旭が人々を救えないのかと文句を言った。彼が姫を慰めていると、そこで突然目が覚めた。

寶旭は耳元でプーン、プーンという音を聞いた。それは蜂の羽の音だった。寶旭は変に思い、夢の中の出来事を友人に伝えると、友人は蜂のために巣を作ってやれと勧めた。蜂の群れが外から飛んでくるので見てみると、隣の老人の三十年あまりになる蜂の巣からであった。その蜂の巣の一部は大きな蛇に破られていた。そこで隣の老人は蛇を捕まえ、殺した。

原作の「蓮花公主」とベトナムの「花國奇縁」は比較的長い作品で、原作を書き換えた日本の「藤生救雀」は短編のものになっている。人物造形の点では、「花國奇縁」の主人公周生、「藤生救雀」の主人公藤氏三郎は原作「蓮花公主」の主人公寶旭に当たる。「花國奇縁」の夢荘姫は原作の蓮花姫の役にあたる。「藤生救雀」では主役の男女による愛情物語は無く、女性の主人公は存在しない。また「藤生救雀」の道服を着た老人は原作中の国王あるいは「花國奇縁」の国母にあたる。

ベトナム、日本、中国の作品における主題、プロット、創作特色などの違いは次のようなものである。

1. 表現方法においては、平坦な記述であるため味わいが無いが、その展開においては要所要所で古典から「対聯（対になった詩）」や詩句を引くなど感情面で訴えるところもある。「藤生救雀」ではこのような詩句はなく、「花國奇縁」では多くの詩句が挿入されている。たとえば、周生の夢が覚めてから夢荘が残した詩を見る。そして彼は一首の詩を作った。「花國良縁久已諧、幾年心事付塵灰、龍車鳳輦歸何処？夜静灯残夢不來（花國の幸福は長く続いたが、ここ数年で泡のように消えた。王と妃を乗せた御輿はどこに戻るのだろうか。夜は静かで灯りはすでに消え、夢は戻って来ない）」という詩である。この詩によって周生の夢の世界への感慨と夢荘への想いが巧みに描かれている。もうひとつの「蓮花公主」では、寶旭が国王の求めに応じて対聯の上の句に対する下の句を作っている。国王が上の句を「才人登桂府（才人が桂府に来た〔宮殿には「桂府」と題した大きな額が飾ってある〕）」と作ると、寶旭は「君子争蓮花（君子は蓮花を争う）」と下の句を作っている。まさしく国王の娘の名は「蓮花」であり、それを詩に取り込んだのである。国王は大いに喜び、娘蓮花を寶旭に紹介しようと考えたのである。このように作者は対聯を作品のなかで使い、二人の主役が出会う契機としたのである。巧みな表

現のひとつであろう。

2. 「花國奇縁」のプロットと原作「蓮花公主」のプロットは極めて似ている。両作品とも男性の主人公が夢を見て、その中でロマンティックな愛情物語が生まれる。だが、石川の「藤生救雀」ではその主題は明確で、藤生の小動物への愛情が描かれ、それが雀たちを蛇から救わせる。そして、善いことをすれば善い報いが返ってくるということで公職に就く。原作と「花國奇縁」の主な内容は不思議な夢の中の愛情物語である。

3. ベトナム、日本、中国の不思議な夢の物語において「花國奇縁」では蝶が擬人化して周生の夢に出てくる。鳥たちは蝶の敵である。「藤生救雀」では雀が擬人化され夢に出てくる。蛇が雀の敵である。原作の「蓮花公主」では蜂が擬人化され寶旭の夢に出てくる。蛇が蜂の敵である。実際に、鳥が蝶を、蛇が雀を食べることは比較的よくあることだが、蛇が蜂を食べることはあまりない。それ故にベトナム、日本の動物を擬人化した物語は比較的合理的で、原作の動物の擬人化による物語は比較的怪異的なものである。

4. 「花國奇縁」の物語では周生が「胡蝶の国」の世界へ入っていくが、作者は叙述のなかの所々で巧みな人物描写を行っている。例えば、周生が入っていく国名は花城国（蝶と花の関係は密接である）で、国母は蝶の王である。周生が会う蝶の姫の名は夢荘で（『莊子』にある莊周が夢で胡蝶になった話から名を取っている）、夢荘の姿は「服の裾が少し見え、そのお腹のあたりには横に縞模様があった」（この描写は蝶の姿を暗示している）となっている。このように蝶の擬人化のプロットが小説中でいくつも見られる。

「藤生救雀」ではその冒頭は藤生が天徳精舎の北院で書を読んでいる時に雀の巣があり、ご飯粒を雀たちにやっていたと始まっており、それが伏線となっている。藤生が雀の巣の世界に入っていくが、作者は雀の生態を文中で暗示や描写することもない。だが、藤生はただ夢から覚めたときに雀たちが蛇に襲われているのを見るだけで、自分が夢で雀の世界に入ったことを知る。一種整然とした筆遣いとなっている。

原作の「蓮花公主」では夢の世界でひとつの物語が作られ、それがこの作品のおもしろさになっている。描写の特色は、作者が作品のなかで動物を擬人化し、何が擬人化されているかを読者に暗示している点である。寶旭が王

国に進み入った後、目の前に「何万の家、何千の門があって、到底この世のものではない」とあり、さらに「宮人女官の往来甚だしい」とある。これは読者に六角形の蜂の巣や、蜜蜂がとても忙しそうにしている様子を連想させるもので、寶旭に対して蜂の国に来るように語った「褐色の服を着た者」も直接蜜蜂の色から取っている。このように作者は蜂の国であることを所々で暗示する。その暗示は「花國奇縁」の蝶の国よりも優れているものであり、「花國奇縁」の描写は原作を真似て、蝶の国の世界を描いたものとも言えよう。以上みてきたように三編の小説はその創作において個々の特色を有している。

## 6. 終わりに

以上、簡単に中国の『聊齋誌異』の二つの作品を翻案したベトナム、日本の漢文小説の創作上の相異を見てきた。最初の「再生」、「阿娟蘇生」と原作「封三娘」は男女の愛情物語、男性の女性に対する愚かな情、あるいは女性の男性に対する痴情を描くことにおいて、「再生」、「阿娟蘇生」の作者は原作とは異なった書き方をした。中国小説の内容やプロットを基に異国情緒のコーンを着せ、ベトナム、日本の翻案作品とした。石川鴻齋の「阿娟蘇生」では、男女が詩を交換する描写が物語に入り、男女のロマンティックな感情を表現し、その内容は読者を感動させるものになっている。中国の「封三娘」とベトナムの「再生」は生死を超えた愛情の物語となっており、これも読者を感動させるものになっている。「封三娘」の范十一娘は男性主人公孟安仁のために殉死をし、また親友封三娘とは生死を超えた友情を結ぶ。それらは読者の心に深く印象を残すものである。

「花國奇縁」と原作「蓮花公主」は夢の中の男女の愛情物語を描いている。作者は動物を擬人化することでその愛情物語に不思議な雰囲気を出している。また「夢」の話にすることで、若い男が高貴な女性にふいに出会い、恋に落ち、未練を残す感情をうまく描き、特に原作の夢幻な感じの描写は出色である。「花國奇縁」は中国の原作を模倣しているものの、独自の風格を打ち立てている。作者の表現力はうまく、詩歌によって伏線をはっている。表現方法上の重要な特色である。石川の「藤生救雀」は原作が持っている怪異的要素

を持つ愛情物語部分を取り去り、勸善懲惡の作品となっている。これはここで紹介したもののなかで最も教化性の強い小説となっていた。

## 註

- <sup>1</sup> 陳益源『『聊齋誌異』對越南小説『傳記摘録』的影響』蒲松齡研究輯集部『蒲松齡研究』2001年4月
- <sup>2</sup> 彭美菁『『聊齋誌異』影響之研究』（台湾中正大学中国文学研究所修士論文）、2003年6月
- <sup>3</sup> 廖宏昌校点『見聞録』（陳慶浩・王三慶主編『越南漢文小説叢刊』7（筆記小説類）、1987年4月
- <sup>4</sup> 本論文中に引用の資料は王三慶、内山知也等編『日本漢文小説叢刊』（台湾学生書局、2003年）第一輯第二冊
- <sup>5</sup> 本稿で引用する『聊齋誌異』原文は張友鶴輯校の上海古籍出版社1992年版に依った。
- <sup>6</sup> 国子監祭酒は明清時代の太学（最高学府）の主管官吏である。
- <sup>7</sup> 許鳴鏞校点『聖宗遺草』（陳慶浩・王三慶主編『越南漢文小説叢刊』2（伝奇類）、1987年4月

(chenbk@cc.shu.edu.tw)